

日本美術史講義 7 b

2021年秋学期 火曜4限

担当：伊藤 大輔

第6回

【注意】

このパワーポイントスライドは、本講義の**受講者専用**です。

許可無く、複製・公開すること、あるいは知り合いや友人へ転送することは**禁じます**。個人の学習のみに使用して下さい。

違反しますと、**作品の所有者、写真の撮影者、写真の出版元等の権利者**とトラブルになる可能性があります。

トラブルを避け、自分の身を守るという観点から、制限にご協力下さい。

はじめに

今回は、前回からの続きで、法隆寺金堂壁画について、各画面の検討を行います。

①法隆寺金堂壁画

(1) 大壁の主題

大壁は、一、六、九、十号壁。
これらの主題は、「**四仏浄土**」
(しぶつじょうど) と言われる。

当時、五重塔の壁画に、「四仏浄土」の主題が描かれていた例が知られている。



九号壁



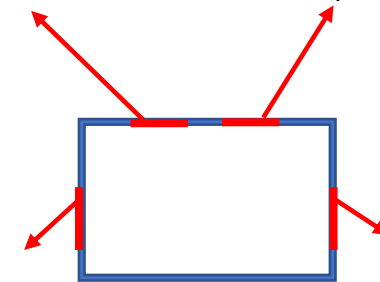
十号壁



六号壁



一号壁



【続いて、各大壁の画面を解説とともに順次確認して下さい。】

①法隆寺金堂壁画

【一号壁】

十大弟子を伴うところから、
「**釈迦浄土**」とされる。

※釈迦三尊の背後に、僧形の人物が、左右に五人ずつ描かれており、十大弟子とみなすことができる。



①法隆寺金堂壁画

【六号壁】

本尊の左右に、観音菩薩と勢至菩薩が立つことから、本尊は阿弥陀如来であり、「阿弥陀浄土図」とされる。

※右の菩薩の冠に化仏があり、左の菩薩の冠に水瓶があることから観音・勢至と決まる。

観音・勢至を脇侍とするのは、阿弥陀三尊であるという規則がある。



①法隆寺金堂壁画

【十号壁】

中尊が左手に薬壺を取ることから、薬師如来と推定され、「**薬師浄土**」とされる。



①法隆寺金堂壁画

【九号壁】

九号壁は剥落が激しく図像が見分けがたいが、中尊と羅漢（左右下隅）と六神王（中尊の左右背後）と見て、『弥勒大成仏経』が説く、弥勒の姿と解釈して、「**弥勒浄土**」とされる。



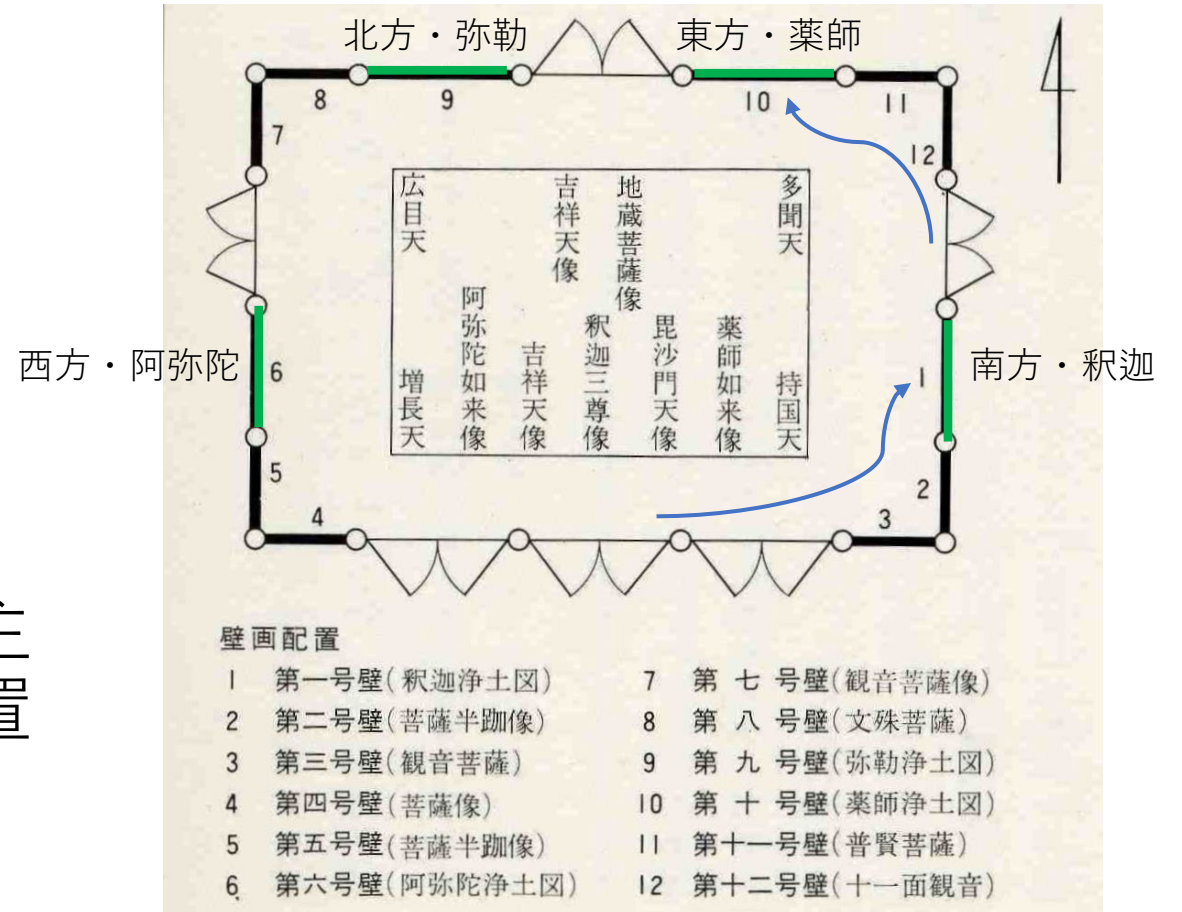
①法隆寺金堂壁画

「四仏浄土」では、

東方：薬師浄土（十号壁）
南方：釈迦浄土（一号壁）
西方：阿弥陀浄土（六号壁）
北方：弥勒浄土（九号壁）

とされるので、壁面の方位と主題の方位がほぼ重なり合う配置となっている。

※南に出入り口があるため、一号壁と十号壁は、90度ずらされている。



①法隆寺金堂壁画

(2) 小壁の構成

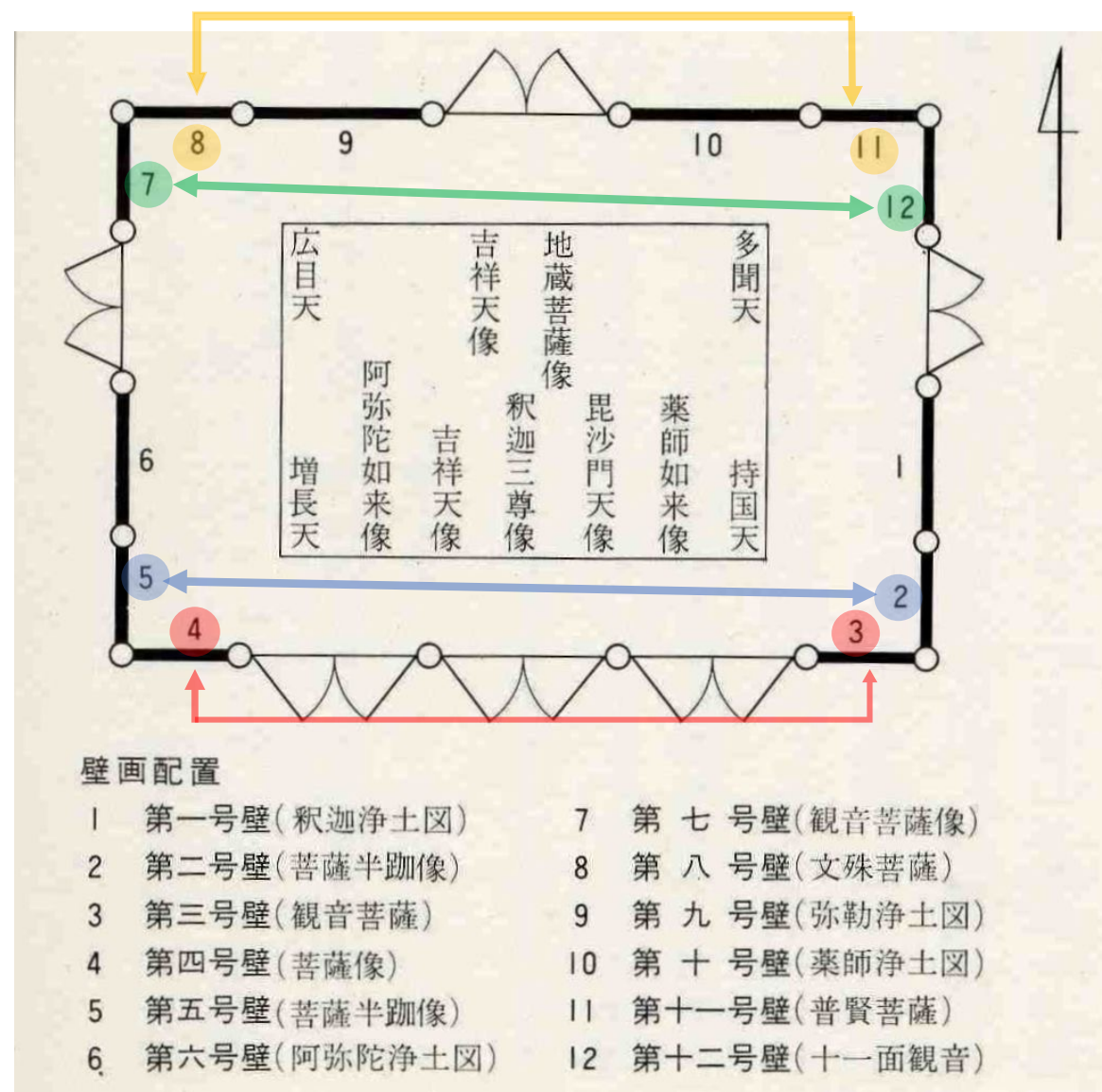
向かい合う壁同士で、対構成を作る。

2号壁と5号壁

3号壁と4号壁

7号壁と12号壁

8号壁と11号壁



①法隆寺金堂壁画

1. 2号壁と5号壁

半跏思惟像が向かい合う



5号壁



2号壁

①法隆寺金堂壁画

2. 3号壁と4号壁

観音菩薩（3号壁）と勢至菩薩（4号壁）が両端に並ぶ

観音と勢至は、「無量寿経」「観無量寿経」において阿弥陀如来の脇侍とされる。



3号壁・観音



4号壁・勢至

①法隆寺金堂壁画

3. 7号壁と12号壁

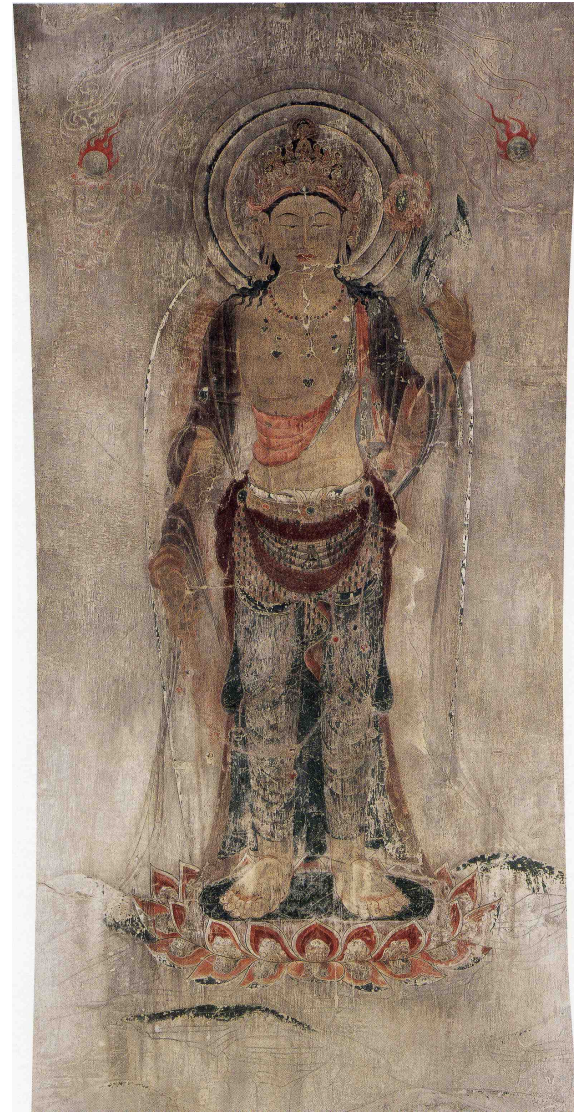
聖観音（7号壁）と十一面観音（12号壁）

聖観音は観音の本体

十一面観音は、聖観音が変化した変化観音。

※「法華経」普門品が説く観音の三十三応身に基づく。

十一面観音信仰が流行した初唐の時期の情勢を取り入れている。



12号壁・十一面観音



7号壁・聖観音

①法隆寺金堂壁画

4. 8号壁と11号壁

文殊菩薩（8号壁）と普賢菩薩（11号壁）

文殊と普賢は、釈迦の脇侍として釈迦三尊像を構成する。



8号壁・文殊



11号壁・普賢

①法隆寺金堂壁画

8号壁の文殊は、獅子に騎乗する通常の姿ではなく、二本の指を立てて、須弥座に胡座する姿



これは、『維摩経』に説く、維摩と問答する際の文殊の姿。

中国初唐期に流行した図像

※貞観十六年（642）

敦煌第220窟に類例がある。



①法隆寺金堂壁画



右：敦煌220窟の文殊像

二本の指を立て、胡座
で須弥座に坐る

①法隆寺金堂壁画

なお、非常に見にくいですが、11号壁の普賢菩薩は、通常の図像どおり、「白象」に騎乗しています。

※現在は体の白色は剥落し、墨の輪郭線のみ見えます。

- ・象の四本足は、蓮華座をそれぞれ踏んでいます。
- ・顔は左向きです。

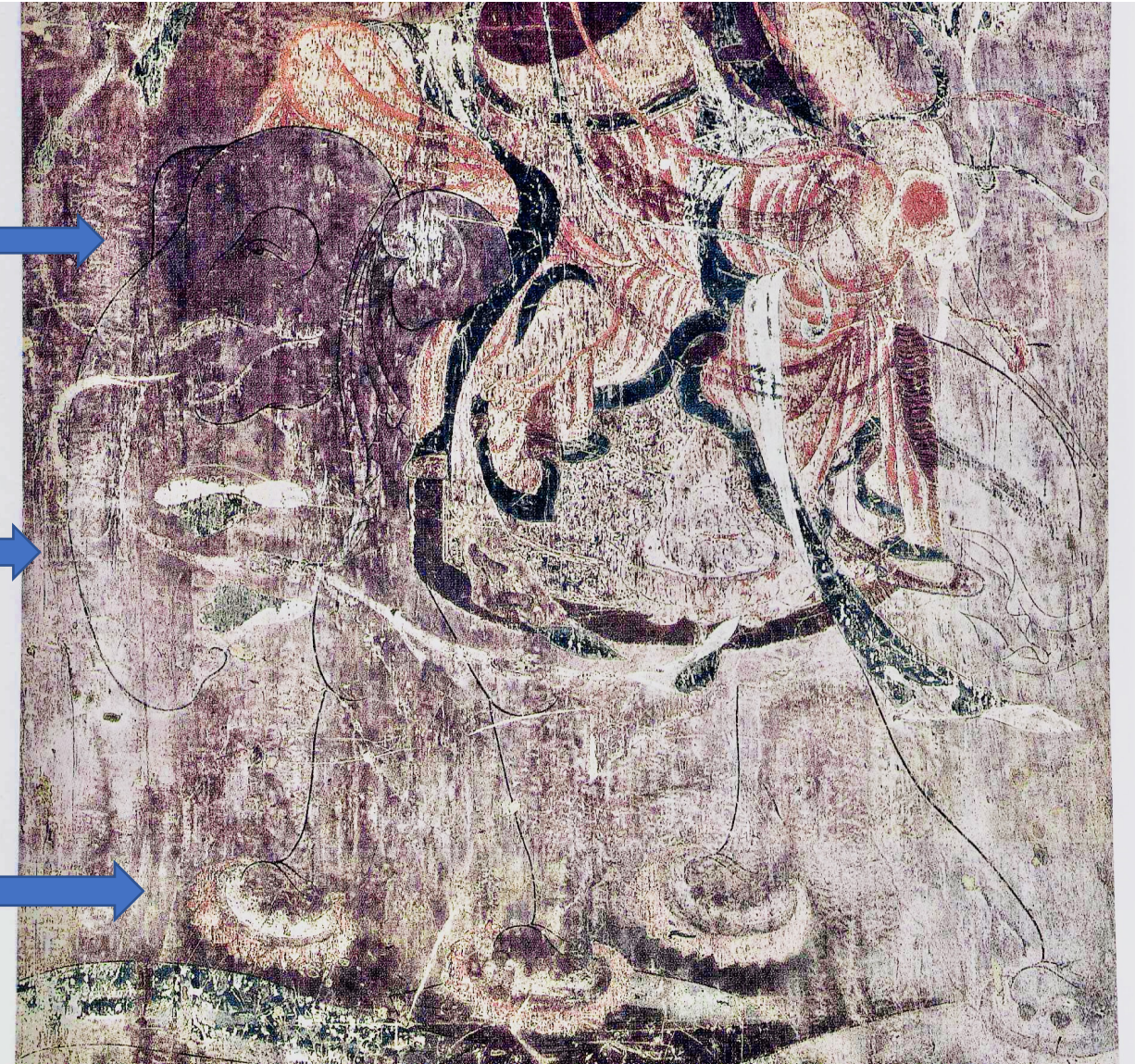
頭目



鼻



脚



※象の輪郭線を見やすいように画像調整しています。

①法隆寺金堂壁画

(3) 作画の技法について

1. 下地づくり～壁下地の上に壁土を三回塗り重ね、白土を塗って画面を作る。
2. 下図を転写～原寸大の下絵を壁面にあて、へらで図様を上からなぞって壁面に筋をつけて写し取る。(筋彫り、または、念紙)
3. 彩色～**隈取り**により立体感の表現。中国の「**凹凸画**」の影響があるとされる。

※**凹凸画**～西域の画家・尉遲乙僧(うっちおっそう)が流行させた、明暗を強調して立体感を生む画法。長安・慈恩寺の塔に「凹凸花」を描くと記録がある。

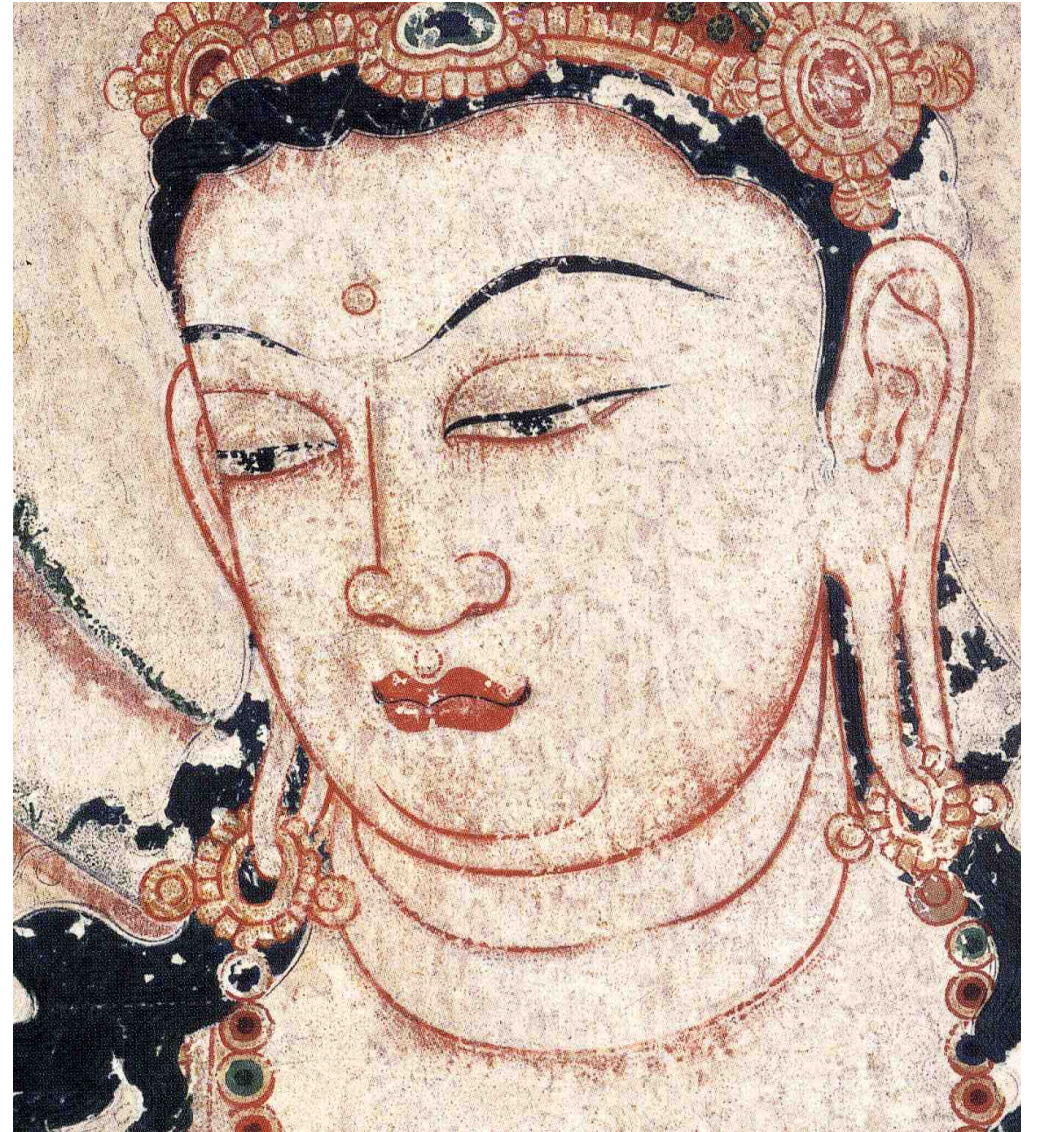
4. 仕上げの線描～**鉄線描**に特色。

※**鉄線描**～ゆっくりと筆を動かし、かすれや肥瘦の変化のない息の長い線。強さとしなやかさを両立させた線描。これも西域由来の描法。

①法隆寺金堂壁画

鉄線描～朱色で、顔の輪郭や
鼻・耳・あご・首筋な
どを描いている朱色の
線

隈取り～目の周り、鼻筋、あご、
首とおとがいのあたり
に見られる朱色、もし
くはややくすんだ朱色
のグラデーション



6号壁・観音菩薩像

今回の講義はここまでです。

日本美術を知る上での一つの標準的な作風ですので、法隆寺金堂壁画の12面の図様や表現をよく観察して、なるべく画風を記憶に留めるようにして下さい。